

## 1 ] 論文の目的と特徴

本論文の課題は、日本中世社会の経済構造の特質について、流通の具体的なあり方を考察することによって、再検討しようとするものである。日本中世の流通研究は、戦前には豊田武氏を代表とする厚い実証研究を基礎として「商業史」と呼ばれてきた。戦後の中世商業史研究は、社会経済史学の盛行のなかで、日本中世の社会構造に特有な流通経済全体のありかたを視野にいれて研究され、「流通史」とよばれるようになる。この研究段階をリードしてきたのが、佐々木銀弥・脇田晴子の両氏である。両氏に共通した研究視角は、日本中世の流通構造を、京都・奈良を中心とする首都市場圏・首都経済圏の成立によって特徴付けられたものとして設定し、全国的流通網が畿内を中心として形成されている、とすることである。一九七〇年代に入ると、歴史研究の分野において地域史の視点が導入された。日本史の分野においては、各々の地域がどのような独自の歴史を歩んだのか、中央の歴史的動向にどのように対応したのか、などが追及されはじめた。

このような研究状況のなかで、私は地方分権化が進行する中世後期の社会構造に適合する流通構造とはどのようなものであるのかを、あらためて検討する必要性を感じた。それは、日本の古代専制国家体制のもとで形成された流通の求心構造は中世を通じても存続するだろうか、という先学の流通の求心構造論に対してむけられた疑問である。とくに、中世後期における各地域の生産力水準の上昇は、それ以前からの流通の求心構造を変質させるに十分な要因となったのではなからうか、と考えたからである。そこから私は地域経済圏を研究の視座として、その実態を究明することにした。すなわち、一九八〇年度の歴史学研究会大会において「中世後期における地域経済圏の構造」を発表して以来、地域的流通を重視し、核となる地域市場の成立、さらに地域経済圏の実態分析などを通じて、中世社会における地方の経済的発展の様相、ひいては社会構造の解明を目的としてきた。

地域経済圏という概念あるいは概念化については、佐々木銀弥氏等「自己完結性のきわめて強い経済地域」を想定する研究者の批判がある。しかし、私は「自己完結性のきわめて強い経済」の存在を前提としていないからこそ、局地的ル－トと幹線ル－トの二重構造によって地域経済圏の流通が構成されていることを指摘したのである。それゆえに、地域経済圏にはその核となる地域市場とそれを取りまく領域の存在を想定はしているが、完結すべきもの、閉鎖的なものではなく、重層的、蜂房構造（蜂の巣状的な構造）を示す、きわめて多様な形態を示していると考ええる。また、地域経済圏の実態は各時代においてさまざまな形態を示すであろうから、その地域の実態については研究の進化のなかでより豊か

な内容が盛り込まれていくと考えている。さらに、地域経済圏というキ-ワ-ドを用いながら、中世社会における経済構造上のさまざまな変容を追及していくことでもできると考えている。その意味で、畿内近国や座商業についても領主制や社会の変容とのかかわりで考察して来た。その結果ここに提示する論考は、地域経済圏の実態究明を第一としながら、以下のテ-マをもって展開した。

1、領域支配者である国人領主・守護・戦国大名等は、地域経済圏の形成によって領域内の物資流通や領域内産業さらに市場・商人に対する支配方法をどのように変質させたのであろうか。また同時に、どのような方法で自己の支配下に置こうとしていたのか。

2、「座商業の変質」といわれる流通構造の中世の変容は、地域経済圏の形成とどのようなかかわりがあるのか。また「座商人」は座の経営形態や経営理念をいかに変容させたのか。

3、市場は、中世には領主の経済政策の一環として設定されたといえる。その場合、市場の設立に際しては市神の祭が不可欠であったが、領主はこれとどのように関わったのであろうか。またその時点で、地域経済圏と信仰圏との関係はどのようなものであったのか。

4、地域経済圏の掌握をめざす国人領主等は、何を媒介として、どのような地域間ネットワークを結んでいたのか。

5、地域経済圏内での職人編成はどのようなものであるのか。たとえば、寺院の再建工事に際し、番匠・鍛冶・諸材料の調達方法等、地域経済圏内ではいかに編成されていたのか。

6、中世社会は地方および中央における経済発展が顕著な時代であったが、殊に女性の経済活動はどのような展開をみせたのか。

このように、地域経済圏をキーワードとすることによって、狭義の経済構造や流通に止まらず、中世社会の構造的特質全体にわたる論点を引き出し、分析できる、と考える。本論文の構成は以下のようなものである。

## 第一部 地域経済圏の実態と商・職人活動

### 第一章 中世後期における地域経済圏の構造

### 第二章 十五世紀備中国新見市場をめぐる諸動向

### 第三章 地域市場としての巖島門前町と流通

### 第四章 戦国期における湖東地域の商・職人編成

### 第五章 中世後期の経済発展と女性の地位

## 第二部 領主支配と流通

### 第一章 国人領主朽木氏の産業・流通支配

### 第二章 十五・十六世紀における「保内商人」団の経営形態変化と経営論理の展開

付論 保内商人研究における隔地間交易について  
第三章 中世後期の問丸 - - 港湾都市兵庫における - -  
第四章 筑後・肥後の国人領主間における友好と交流  
第五章 中世後期における市立て・座支配権とその解体  
第六章 中世都市としての瀬高

以下では第一部及び第二部の各論における検討課題とその結果として導き出された結論及び私の主張点について述べていきたい。

## 2 ] 各章の要約と特徴

### 第一部「地域経済圏の実態と商・職人活動」

地域市場を核とする地域経済圏の実態を考察する。さらに商品流通のあり方、領主権力との関係、職人編成、京の女性商人などについても考察した。

第一章「中世後期における地域経済圏の構造」は、地域分権化が進展した中世後期の社会における地域経済圏、とくに流通構造のあり方を検討することが課題である。中世後期の流通の特質は、佐々木銀弥・脇田晴子氏らによって提唱された「流通の畿内への求心構造論」では解けない。その実態を瀬戸内海の地域市場（地域経済圏の核となる市場）を中心として考察した。この地域市場は、地方と畿内とを結ぶ流通（幹線ル - ト）と地域間交易をになう流通（局知的ル - ト）との二つの流通ルートで構成され、この重層的な流通ルートを持つことで、地域経済圏が全国的な流通網に組み込まれていることを論じた。地域市場の具体的な素材としては周防国防府と安芸国厳島をとりあげた。

第二章「十五世紀備中新見市場をめぐる諸動向」・第三章「地域市場としての厳島門前町と流通」は、前章で検証した地域経済圏の具体像を詳細に検討したものである。第二章は山間部に立地する備中国新見荘の市場を考察の対象とした。その結果、新見荘は山間部にあって山陰・山陽側さらには備前国の国衙に通じるなど街道、さらに河川に恵まれており、畿内等からの商人も出入りする地域市場の役割を果たしていたことが検証できた。第三章は第一章で検討した安芸国厳島の事例をより詳細に検討したものである。厳島神社の門前町は幹線ル - トに開かれた市場としての役割を担い、明からの貿易品の供給地でもあった。と同時に、その対岸の廿日市が内陸部への物資の供給地たる役割を果たし、両者が一体化して地域市場の特性を持っていたのである。その点で、戦国大名大内氏が領国経営上最重要視した地域であったと論じた。

第四章「戦国期における湖東地域の商・職人編成」は、地域経済圏を支える商・職人編成のあり方を、十六世紀近江国蒲生郡長命寺の再建を例として考察したものである。この事例の選択は、武家の支配領域内での流通支配とは異なり、地域をイデオロギ - 的に支配

し、住民の精神的バックボーンとなる寺社の存在に着目し、地域経済圏内の手工業者の編成のあり方を追及することにある。考察の結果として、長命寺の再建に必要な物資・職人のほとんどが地域内で供給可能であり、供給不可能な物資は商人によって地域外から供給される体制ができあがっていたこと、さらに職人は、かつて長命寺に抱えられていた番匠ら大工衆が、大工職を獲得して地域内の営業権を主張する段階に至っていたことを検証した。ここから、地域経済圏内の手工業者は、専門職として自立し、営業権のテリトリーをもち、他の職人集団との分業関係を形成して寺社建築等の大事業に参画する、非常に専門性の高い編成のされ方であったとした。以上から、地域経済圏内の再生産・流通構造が面的な広がりを持っていたことを論証できた。

第五章「中世後期の経済発展と女性の地位」は、中世後期の経済発展の下での京都を中心とした地域の女性の社会的地位、および商・職人活動について検討したものの。考察の対象としたのは『七十一番職人歌合』に載る女性の商人・職人である。彼女らは、京の伝統的な座や供御人に編成されており、それによって京都での行商活動・店舗売りなどの商業活動が保証されていた。また、女性商人が座に所属するあり方は、夫が座に所属して商品を製造し、その二次的活動として妻が行商を行う例、他方は女性商人自身が座に所属して商業活動を展開していた。後者の場合は女性商人の積極的な経営活動の様子が窺われ、その社会的地位の高さも知ることができた。さらに、京都を中心とする女性商人の活動は、中世最大の都市＝京都であることで可能なものであった。また、京都の産業を支えた原材料は地方から供給されていたことが指摘でき、ここに地方の経済や流通の発展に支えられた京都（畿内）経済の発展があったといえる。

以上の第一部によって、中世後期の流通の特徴が単に畿内への流通の求心性だけでは解明できない実態を示していることを明確に示せたと考える。

## 第二部 領主支配と流通

中世後期の経済発展の成果を、国人領主や戦国大名などの領域支配者が、いかなる方法で収奪しようとしたのか、そのための経済（商人・都市・市場・流通）政策はどのようなものであったのかを検討課題とした。また、地域経済圏の成立に対応して、座商人や港湾都市の問丸は自己の経営内容をどのように変質・展開させたのかについても検討した。

第一章「国人領主朽木氏の産業・流通支配」は、近江国高島郡の国人領主朽木氏が、支配領域内の産業・流通支配に乗り出す中世後期社会における関銭、市場銭などの非農業部門への課税のあり方、またそれらが領主財政に占める位置付けについて論じたものである。このような課税は当該時期に各地域で広範に行われたが、国人領主による関銭徴収の実態は解明されていなかった。本論で関銭の算用状の分析から、関銭収入が国人領主の財政上重要な収入源であり、当該社会において商業利益の収奪方法として関銭徴収が大変有効な

ものであったことも指摘した。その他非農業部門の収入は、朽木荘の中心集落での市場銭の徴収、周辺の山林を活用する板生産への課税、領内の河川での漁業税「川狩銭」などで、これへの比重が増大していくことが、中世後期の領主財政の特徴であったと論じた。

第二章「十五・十六世紀における『保内商人団』の経営形態変化と経営論理の展開」は、地域経済圏が形成されていく社会状況下で商業活動を展開した保内商人が、どのような経営上の変革を遂げたのかを追及したもの。従来の研究では、保内商人は村落に居住し、座を結成して商売を行っていたことから村落座商人の典型として捉えられている。しかし、脇田晴子氏によると、市売りを主体とする保内商人の営業は、十六世紀に入ると流通路の独占的通行を主張する隔地間取引に主眼が置かれるとされる。本稿ではかかる経営の転換が起きた要因について、保内商人の掟の分析、紙の輸送をめぐる枝村商人との相論、六角氏権力との結合などの面から検討した。その結果、保内商人は周辺の旧来からの座との対抗関の中で、彼ら自身が「新儀商人」と呼ばれる地域経済圏の形成に適合した商業スタイルを展開する商人集団へと変質していったことを論証した。

付論「保内商人研究における隔地間取引について」は、第二章を展開する前提となるものであり、隔地間取引の視点から、保内商人研究を行うことの重要性を指摘したもので、地域間取引の研究が十六世紀の流通の特徴を解明する鍵となることを主張した。

第三章「中世後期の問丸」は、瀬戸内海流通路の畿内への窓口である兵庫津での問丸の活動を、兵庫関の修築問題、さらに国内の地域間交易・日明貿易などの側面から追及したもの。室町幕府は、日明貿易の再開に向けて、幕府の御用を勤める御倉に港の修築を求めて拒否されている。これは、御倉がその経済力を背景に、経営効率に反する要求は受け入れない姿勢を堅持したこと（これは幕府権力の弱体化である）を示している。幕府御倉の本来の業務は高利貸活動であったが、当該期には幕府財政を担当するなど経営の多角化が行われていた。一方、問丸の経営実態については、『兵庫北関入船納帳』から扱荷件数の多い問丸五名について考察した。ここから問丸の扱荷が専門化すること。さらに問丸道祐は、高利貸的機能を持ち、問職に任命されて年貢物販売の権限や問職の推挙権を獲得し、これによって中小問丸を統制下においたと考えられること。また、兵庫津には日明貿易に参加する商人も存在したが、その一人世善は問丸であり、倉を経営（「將軍様商売物」の一時保管をする）遣明船に参加するなど日明貿易に際して重要な役割を果たしていることを論証した。これら中世後期の問丸が経営内容の多角化をはかる背景は、各地に成立する地域経済圏と全国的流通を結ぶ結節点で活動する問丸にとって、活発化する物資流通に対応しつつ、できるだけ経営効率を上げる必用に迫られていたからであると考えられる。

第四章「筑後・肥後の国人領主間における友好と交流」は、筑後（田尻氏）と肥後（小代氏）の国人領主間を事例として、中世後期社会における地域ネットワークについて考察

した。両者は、大友氏の支配下にあり、同盟関係を結びやすい立場にあった。しかしそれだけではなく、相互に起請文を交し、各々の領域支配を安定的なものとする方法を模索している。彼等が強力な権力下に参集するのは、そのための一つの選択肢であったと考えられる。また、刀の入手経路の考察からは、周辺地域の国人領主間及び家臣関係などさまざまな交流関係が指摘できた。しかし、近世に入ると独自の必要性から結ばれたネットワークは、幕府と藩という縦系列の秩序の前に、藩域を越える交流を否定されたことをも指摘した。

第五章「中世後期における市立て・座支配権とその解体」は、『高良玉垂宮神秘書』の分析を通じて筑後国一宮（高良大社）が持つ筑後地域の市立権・市祭権・座支配権が、中世後期社会、そして近世社会の成立とともに変質していく課程を検討したもの。同書によると、中世前期には高良大社は少なくとも筑後地域では市立の権限、さらには市の管理権を所有したことが確認できる。しかし、これらの権限は、この地域を支配下においた国人領主、さらにはその上位権力である大友氏に移行して行く。中世後期の文書からは、高良大社の大祝・神官等が大友氏の支配下に入り、国人領主と同様に戦いに参加し、所領安堵を受けるなど、高良大社の地位・権限の低下となって現われている。高良大社の市神の信仰圏は残存し、市立の際の市祭りには親市からの市神の勧請が行われるが、そこには高良大社の市立権の主張はない。この傾向は近世ではより進行することを論証した。

第六章「中世都市としての瀬高」は、九州における地方中世都市の具体像を考察することを目的とした。八十年代に中世都市研究は飛躍的に進み、中世の地方都市の実態が明らかになってきたが、九州の中世都市については地方都市といえる事例が考察されていない。この筑後国瀬高は、矢部川にのぞみ、瀬高荘の津から発展したものと考えられる。鎌倉期の文書から、政所・倉敷・津料・梶取・商人が確認できる。瀬高荘の中心地として商取引の機能を有する地（都市的な場）であることがわかる。また、中世後期の瀬高津は有明海沿岸に広がる河川交通の、河港としての発展がみられる。さらに、瀬高には高良大社の支配した瀬高座の存在があり、高良大社に奉仕した職人集団の存在も想定される。すなわち、矢部川の河川交通と有明海の海上交通、筑後の国府からの陸上ルートとが交差する瀬高は交通の要衝として中世後期の地方都市であったとことを論証した。

以上概観したように、私の研究は社会発展の基礎は経済の発展にあるとする社会経済史学の視点に立脚するものである。その立場から、中世後期社会において、政治的には地方分権化が進行し、経済的には流通経済の発展を梃子として変質する社会を分析するに有効な概念が、「地域経済圏」であると言える。